『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

# 梵天勧請

小川一乗

只今ご紹介いただきました大谷大学の小川でございます。この度こういうご縁を頂きましてお話をさせていただくことになりました。十分な話もできませんが、最後まで耳を傾けていただきたいと存じます。

梵天勧請（ぼんてんかんじょう）という言葉は、皆さん方にとっては初めてお聞きになる言葉ではないかと思います。私は只今のご紹介にもありましたように、インドのほうの仏教を専門にしておりますので、今日はその中から「梵天勧請」というテーマを掲げさせていただきました。

釈尊、釈迦牟尼仏陀というインドの聖者によって仏教が始まるわけで、皆さん方はこの大学

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

に入られまして、釈尊の伝記について講義を受けておられると思いますけれども、私は釈尊の一生の中で、この梵天勧請ということが非常に重要な意味を持っているのではないかと思います。

皆さんもご存知のように、今から約二千四、五百年ほど前に、ゴータマ・シッダルタという方がこの世に誕生されまして、二十九歳で出家をされます。そして六年間の苦行生活を経て、三十五歳で菩提樹の下で悟りを開き、ゴータマ・ブッダ、釈尊となられるわけです。五人の仲間と苦行生活をしておられた仏陀釈尊は、苦行の中では人生への正しい目覚めは不可能であると確信して苦行を捨て、六年間の身体の穢れを河で洗い落として菩提樹の下に静かに座られ、そこで悟りを開かれた、と「仏伝」でいわれております。

「仏伝」を読んでいきますと、仏教の悟りを得た仏陀は、四週間にわたりそこで瞑想を続けられたのですが、それは一カ所に座ってではなく、一週間ごとに席を立って座る場所を変えて瞑想を続けられた。四週間の瞑想ののちに仏陀は一つの大きな絶望に陥る。それは、自分の悟った仏教の真理を、人々に話してもまずわかってもらえぬだろう。誤解を生むだけであろう。正しい悟りが世の中を穢す結果になるかもしれない。だから、自分の悟りは自分だけの楽しみ

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

にしておき、説法はしないでおこうと決心されたのです。それを「説法不可能の絶望」といいます。

釈尊の絶望と決心を知った梵天は驚きます。梵天というのはブラフマナーという、インド古来の神様で、この地球を創り、地球上に人類を創造し、その人類を支配する神話の世界の神様で、我々の代表者と考えていいと思います。その梵天が釈尊の胸のうちを知りまして、折角素晴らしい悟りを開かれたのにそれを説法せずに終わろうとしている、これは人類にとって大変なことだと釈尊の前に姿を現します。そして釈尊が説法不可能という絶望に陥っていることを悲しみ、どうか絶望せずに説法に踏み切ってくださいとお願いする。お願いすることを勧請というのです。人類の代表である梵天という神様が釈尊の前に姿を現し説法を要請したということはいうまでもなく神話的な表現ですが、これは何を意味するかというと、我々全人類がお釈迦様に、悟りの内容を説法してくださいとお願いしたということなのです。それに対して釈尊は、いや、やめておこうと断る。また梵天がお願いする。また断る。何度か繰返されたのち釈尊は説法に踏み切った、これが梵天勧請として、仏陀の生涯を文学的に記録してある「仏伝」の中に出てくる重要な場面なのです。

梵天勧請

それを従来は、釈尊は説法不可能という絶望に陥ったが、梵天の勧請により、釈尊に大きな慈悲の心があったので、この世の中には話のわかる人もいるからと説法に踏み切られた、という解釈に終わっていたわけです。ところが私は、単にそういう表面的なことだけではなく、「梵天勧請」と「釈尊の説法不可能の絶望」との間に何か深い意味があるのではないか、梵天勧請はどういう意味を我々に問いかけているのだろうか、もう一度考えてみようと思ったのです。

そしてこれは私たちのことを言っているのではないだろうかと思ったのです。なぜなら私たちは、釈尊の悟りを聞きたい、教えてもらいたい、人間としての正しい真実なるものに眼（まなこ）を開きたい、という大きな願いを持ちながら、現実ではその願いに眼を塞ぎ、目先の楽しみ、目前の欲望にうつつを抜かしている。これが私たちの姿ではないか。本当に深く人生を考えることもせずに、ただ、目先の快楽を求めている人々の日頃の生き方を見て釈尊は、説法は無駄である、不可能であると絶望に陥ったわけです。しかし、表面的には釈尊が絶望するようないい加減な生活をしている人間が、実は心の底では、真実なるものに目覚めたい、本当のことを知りたいという願いを持って生きている。それが人間の本当の姿である。大谷大学の先生ではご

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）



ざいませんが、安田理深という先生が「人間は本能で宗教を求めているけれども、理性が反対している」と言われたことがあります。理性という言葉をこの先生がどういう意味で使われたかはわかりませんけれども、仏教の言葉でいえば分別でしょう。これは正しい、これは正しくない。あの人はいい人だ、あの人は悪い人だといった人間の分別の心が、いつの間にか人間の素直な眼を塞いでしまっていくということがあるのではないか。それをその先生は先程の言い方で表現されたと思うのです。釈尊が我々に絶望し、そして我々が梵天を通して釈尊に説法をお願いする。これは一見矛盾しているようですけれども、決して矛盾ではない。一方で真実を求めつつ、一方でそれに背を向けて生きている。そうした人間の現実の姿がこの梵天勧請という物語で表現されていると思います。

人間は自分の本当の姿をなかなか見ようとしませんが、私たちが私たちの真実に眼を開かせてもらうということにつきまして、亡くなった大谷大学の金子大栄先生は、「人間は二回生まれる。母親の胎内から生まれるのが第一回目の誕生であり、自分を死ぬ存在として、生きていることに気付き、生きていることの意味をしっかりと考える時に第二回目の誕生がある」、ということをおっしゃっていまして、なるほどと思います。一回目の誕生は、肉体的に生まれた

時であるけれども、自分はいずれ死ぬと気付き、死ぬ人間として生きるということはどういうことかを考えざるを得ないその時が、人間としての二回目の誕生である、と。

皆さん方もそういうことはもうお考えになっていると思いますが、私も皆さん方よりも少し若い頃、小学生か中学生の頃に、人間は死ぬんだということ、そして生きているということは一体どういうことなのか、を考えたことがあります。そして自分の存在がいかにもちっぽけではかないものに見えて、淋しく悲しかった、そういう少年時代がありました。例えば、岸辺に立って広い大海原を眺めている時、自分の存在とは一体なんだろうか。自分の五十年、八十年という人生は、この広い大海から見ると、岸辺に打ち寄せては一瞬のうちに消え去る一つの波に等しいのではないだろうか。人生とはなんとはかないものであろう。そしてはかないうちに死んでいかなければならない人生とは一体何なんだろうか、と素直な疑問と驚きを持ったことがあります。

しかしその時に私はふっと思ったのです。私の人生は、岸辺に打ち寄せる一つの波に過ぎないけれども、その波はどうして起こるのであろうか。大きな海があって起こっているのではないか。大きな海がなければ私の波はないのではないだろうか。そうすると私の五十年、八十年

の人生は、それだけ捉えるとちっぽけな短いものかもしれないけれども、その裏には大きな果てしなく広い海があって、それが波として表現されているのである。私の頭では考え切れないくらい大きな海が私を生み出し、今、私を私たらしめているんだ、と。

そのことに思い至った時、自分はなんとすごい命を持った存在なのだろう。私の背景にはなんと大きなものがあるのだろう。私の人生五十年、八十年は決してちっぽけなものではない。大きな無限の命が私の上に今花開いて、そういう存在として今生きているのであるから、やはり精いっぱい生きなければならないと思いました。そう思った時、人生は明るい、素晴らしいものとして、私の上に輝いてきました。そういう感動を受けた経験があります。

しかし私たちは理性・知性・分別を持ち始めると、そういうものから遠ざかっていく。心理学者によると、大体四歳くらいから知性が芽生え始め、十歳くらいになると完全に分別がつく。私たちは分別の世界で生きていくことになる。その分別の中で、私たちは最も大切な自分の存在に対する感動を失っていくのです。とくに最近のような、なんでも買える物質文明の発達した時代においては、なおさら物が心を遠ざけていきます。物質によって大事なものを見失っているのではないかと思います。そうした状況の中で生きていかねばならぬ私たちは、深い苦悩

を受けて生きていかざるを得ないと思うのです。

昨年十一月にございました大谷大学の学園祭に、大学主催で宗教シンポジウムを開きました。毎年いろいろな先生をお招きして基調講演を聞いたあとディスカッションをするのですが、昨年は京都大学教授の河合隼雄先生と、東京大学名誉教授の玉城康四郎先生をお招きして、人間の問題を討論いたしました。この河合先生のお話に大変印象深いものがありましたので、少しそのお話をさせていただきます。

河合先生はユングの心理学をご専門にしておられまして、その研究家として世界的に知られたお方です。先生は人間の表面に表れた心の動きではなく、その人自身すら気付かない、ずっと深いところにある、深いところではたらいている心の動きを明らかにしていきながら、それを通して現実の問題を解決する、そういう臨床心理学の分野で大変著名な方でいらっしゃいます。従って、先生の研究室にはいろいろな相談者が訪れる。とくに最近は、教育の問題、中でも登校拒否とか家庭内暴力についての相談が多いそうですが、そのうちの家庭内暴力について、先生は基調講演の中でおもしろいことをおっしゃっています。

皆さん方の中に家庭内暴力の経験者がおられるかどうかわかりませんが、親に相当きつい要

求をするようです。例えばある息子さんは、ガラス戸を倒しまして、その割れたガラスの上で裸で寝ろとか、風呂を沸かして服を着たまま入れとか、それを父親、母親に強制する。そして暴力をふるうそうです。相談に来るわけですから、そういう考えられないようなことが現実におこなわれているんです。そこでその両親はついに我慢できなくなってある先生の所へ相談に行きまして、今まで息子のいうことはなんでも聞いてきたが、これ以上続けば自分たちの身がもたないのでどうすればいいかと聞いたのです。その先生は、「それはあなたが間違っている。子どものいうことばかり聞いているからそういうことになるので、時には父親の権威を示してそれは駄目だとはっきり言ってごらんなさい」といわれた。それで息子さんが次にむちゃな要求をした時に、父親をなんと心得るか、父親にそんな要求をすることはけしからん、と拳を振り上げて殴ろうとして、逆に殴り返されてしまった。それでまた別の心理学の先生の所へ行ってそのことを言いまして、どうすればいいかと相談しましたら、その先生は、「それは子どものいうことをなんでも聞いてやらなければいかん」と言われる。最後にその両親は河合先生の所へ、「一体どうしたらいいんでしょうか」と相談に行かれたんです。

河合先生は答えを出さないのです。答えがわからないのだそうです。それで、「大変ですね

え。困りましたねえ。むずかしいですねえ。私にもわかりません。それではまた来週お話しに来てください」、これだけしか言えないのです。次の週に両親が来られた時にいろいろと話を聞く。また「大変ですねえ。むずかしいですねえ」といって帰ってもらう。次の週も来てもらって話を聞くのですが、来るたびに話は少しずつ変わっていきますから、それを繰り返しているうちに、その親子には何が問題なのか、その糸口を見つけ出していかれる。そして少しずつ問題を的確に把握しながら焦点をしぼっていく。お父さん、お母さんだけでなく、時には子どもさんの意見も聞かれる。そして、両親にもわからないし子ども自身も気付かない心の深い奥底で、お互いが結ばれていないものは一体何だろうかということを探りながら、ことの解決に当たっていかれるわけです。そういう方法で沢山の家庭の危機を救っておられるのです。

そういう中で、先生が見事に解決して非常にうれしかったというお話をしてくださいました。これも家庭内暴力のお話です。両親が暴力をふるった子どもに対して言われるんです。「お父さんとお母さんはあなたのためになんでもしてあげた。物も買ってやったし部屋も作ってやった。塾にも行かせてやったし家庭教師も雇ってやったし、なんでもしてやった。で、何が不足でおまえは暴れるのか」と。そういったら、子どもが一言、「うちに宗教があるか。」それで両

親はギャフンと参ってしまったわけです。うちに宗教あるか、という意味は、何もどこかの信者になれとか、どこかの神社やお寺へお詣りに行けということではないのです。子ども自身も気付かないところで、その言葉が出てきたわけです。子どもの食ってかかった言葉に、押さえ切れない不満が表現されているのです。その子どもの不満が何なのか、それを見抜くのが河合先生の仕事なのです。

ここに二つの問題があると河合先生はおっしゃっています。一つは、親は子どものためになんでもしてやったというが、この意識がまず根本的な誤りである。相手のためになんでもできるのは神様しかいない。それができるというのは大変な思い上がりで、間違いである。それではみずからが、人間である分限を超えて神様になってしまっている。なんでもしてやったという心の裏には大きな隙間があり、思い上がりの心の裏には大変大きな落とし穴があるということが一つあります。

そして、うちに宗教あるかと食ってかかった子どもの要求は何か。物さえ与えれば、お金さえ与えれば子どもは満足するであろうと、親は「物の神様」になっていたのです。最も大切な親と子の絆、心が失われていたのです。「うちに宗教あるか」という子どもの一言で、河合先

生は解決の道を見出されたのです。子ども自身、自分は何を求めているのか、心が大事であるとかは意識の上ではわかっていませんが、親がいつの間にか「物の神様」になっていることが不満で仕方がない。その不満、もやもやした気持ちが家庭内暴力を惹き起こしていたのです。そして河合先生が両親に、先程いったような子どものためになんでもしてやったというのは大変な思い上がりである、これは神様しかできないことなのだということを教え、子どもが何を要求しているかということを話し合った結果、その家庭は見事に元の平和な家庭に戻ったのです。

その時、親と子どもの間で何が確認されたか。それは極めて単純なことで、「私たちはおまえの親であり、おまえは私の子どもである」、そのことが最終的にきちんと確認できたわけです。結論は簡単なんです。ところが私たちは、本当に親と子という強い絆で結ばれているという、人間としての深い結び付きを見失っている。それは物を与えることが愛情だとか、物で親子の関係が成り立っているとか、とんでもない錯覚をしている。物によってごまかされて生きていて、その結果、人間が持っている最も大事なものを見失ったからなんです。そうしてこの場合は、親子が親子であるという確認をして、やっと信頼できる、にっこりと手をつないでい

ける世界に出会ったわけですが、現代のような物質万能主義の物質文明の日常生活の中で、最も犠牲を強いられるのが感受性の強い子どもです。敏感で純心で多感な子どもが、一番「物質の神様」の被害を受けているのです。ますます繁栄していく社会の中で、それが我々に与えられた重要な問題であると河合先生はいっておられます。

この河合先生のお話を聞いておりまして、私は、仏教で有名な「王舎城の悲劇」という説話を思い出しました。「王舎城の悲劇」、聞いたことありますか。これは釈尊の晩年に、インドに実際に起こった悲劇で、『観無量寿経』の最初に出てくる物語です。

インドに、王舎城という釈尊の在世当時最も栄えていた大きな国があります。国王はビンバシャラ王といって、仏教に、釈尊の教えに深く帰依していました。その息子のアジャセは早く王位に就きたくて、父王を牢獄に幽閉します。アジャセは王位に就いたけれども、自分の親であるビンバシャラ王を斬り殺すことはできませんので、水や食物を与えずに、自然に餓死させようとします。そこでアジャセの母のイダイケ夫人が夫を助けようと、身体に蜂蜜を塗ったりネックレスや他の装飾品に栄養になるものを詰めたりしてビンバシャラ王を見舞い、夫にそれを嘗めさせたりします。いつまで経っても父親が死なないので家来に調べさせると、母親がそ

のようにして父の命を長らえさせていることがわかり、アジャセはかんかんに怒ってその場でイダイケ夫人を斬り殺そうとします。その時家臣が、「国を乗っ取るために父親を殺した息子はいるけれども、母親を殺したことなど聞いたこともない、それだけはやめてくれ」と諌めたので、母親も同様に牢獄に閉じ込めるわけです。

イダイケ夫人は嘆き悲しみます。そしてその時、王舎城の中心部ラージギルのほぼ中央にあるギシャクッセンという小さい山の上におられた釈尊に向かって愚痴をこぼされます。『観無量寿経』を読みますと、「昔、我れ何の罪ありてかこの悪子を生まん」とありますが、私にどんな罪があってこんな悪い子が生まれてきたんでしょうかと嘆き悲しみ、どうかお救いくださいと釈尊に向かって礼拝合掌する。すると釈尊は神通力をもってイダイケ夫人の前に姿を現す。この辺は神話的な表現になっていて、物語です。そしてイダイケ夫人は、どうか今置かれているような嘆かわしいことのない世界へ行きたいと釈尊に愚痴をいうわけです。その愚痴をお聞きになった釈尊が神通力でもって最初にイダイケ夫人に見せたのは、死ぬ寸前の夫ビンバシャラ王の牢獄での姿だったのです。それを見るとビンバシャラ王は、イダイケ夫人のように嘆き悲しんでおられないのです。お釈迦様の姿を見ると合掌し、地面に頭を着けて恭しく礼拝し、

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）



帰依の姿をとっておられるビンバシャラ王のもの静かな姿をまずイダイケ夫人に見せられるのです。そして世の真実をこんこんとイダイケ夫人に説き明かしていかれます。そのうちにイダイケ夫人は救われていく。救われていくというのは牢獄から出されるわけではありません。同じように牢獄の中で死を迎えていくわけですけれども、今までの恨みつらみがイダイケ夫人の心から消えて、明るい清らかな心になっていく。そして子どもを悪子とした自分の心のあり方を深く懺悔しながら心安らかに救われていくのです。イダイケ夫人は何を悟ったのだろうか。それは、生きているというあたりまえのことが、あたりまえのままによくわかったということなのです。

あたりまえのこととはどういうことでしょうか。例えば皆さんの中に、今朝目が覚めた時に、ああ今日も目が覚めた、よかったなあ、今日一日学校にも行ける、友だちにも会える、うれしいなあ、素晴らしいなあと、清々しい感激をもって起きた人、いらっしゃいますか。いないでしょう。誰でも、あたりまえだと思うでしょう。ところがある朝、目が覚めた時、足が動かない、手が動かないとしたらどうしますか。それをあたりまえと思いますか。困った、と思うでしょう。その時は大変です。どんな悪いことをして、こんな目に会わなきゃならんのだろうと

思うでしょう。私たちは、自分に都合のいいことはあたりまえだと引き受け、都合の悪いことはあたりまえではなくなるのです。簡単なことなんですが、この事実に私たちは目を塞いでいるんです。生まれた者は死にます。若い者は齢をとります。健康な者は病気になります。これが生きているということのあたりまえなんです。しかし、あたりまえでないことが起こると、これは何かの祟りではないかと考えます。若くて健康な時はあたりまえで生きていきますが、齢をとり、病気になる、すると何かの祟りじゃないかと考える。生きている以上、死ぬのはあたりまえ、健康であれば病いになるのはあたりまえ、若ければ齢をとるのがあたりまえです。そのあたりまえを私たちはあたりまえと引き受けることができない。自分に都合のいいことだけをあたりまえと引き受けながら、都合の悪いことが起こると迷ったり、祟りだといって他人に罪を被せたりという低次元の情ない発想をして、自分の本当の姿を見失って生きていくわけです。

イダイケ夫人も迷ったのです。どうしてこんな悪い子を生んだのかと、自分の子を悪者にしてしまったわけです。そういう母親の心からは、真実は見えてきません。人間がこの世に生まれ、死んでいくのがあたりまえなのと同じように、この世にあれば、そういう事件も起こって

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）



きます。死ぬのもあたりまえなら、朝、目が覚めるのもあたりまえで、共に私たちの力を超えた大きな世界の中で生きていながら、物によってごまかされてしまい、それを喜べない人間になっている。そのすべてがあたりまえという世界に、釈尊はイダイケを導いていくわけです。たとえ病気になろうが、たとえ齢をとろうが、たとえ子どもに裏切られようが、そこに自分の人生の意味を感じ取っていく。病気になれば病気を引き受けていく。齢をとれば齢をとったということを引き受けていく。息子に背かれれば背かれたことを引き受けていく深い人生観を持つ。そこに深い仏教の思想があるわけですが、イダイケ夫人も、自分に都合のいいことだけを引き受け、都合の悪いことは他のせいにするといった生き方をしていた己れ自身に目覚めたということです。本当の姿に目覚めていくということは、自分に都合のいい何かが起こることではなく、都合の悪いことも引き受けていける世界に目が開けたということなのです。

先程の河合先生の話を聞きながら、私はこの「王舎城の悲劇」をふと思い出したわけでございます。アジャセも国王の一人息子として、きっと、欲しいものは全部与えられながら、好き放題に育った人間だと思います。欲しいものは与えられたけれども、しかし何か満たされなかった。何かが胸につかえていた。そして表面的な姿としては、父王の位を早く継ぎたいとい

う野望として表現されているけれども、心の奥底では耐え切れないもの、抑え切れない何かがあったと思います。心が本当に満たされていれば、親子の間にもっと深い心の絆があれば、また違ったものになっていたと思うのですが、心の深い所で、お互いに気付かない世界で、明確にならないものがあった。私たちはもっと、心というものを考えていかなければならない。心というものが最も端的に表れるのが親子の関係ではないかと、河合先生のお話を聞きながら思ったわけです。

私たちもこのイダイケ夫人と同じ生き方をしているのではないかと思います。自分の都合のいい時には、わが子をいい子、かわいい子と育てながら、都合が悪くなると、なんて悪い子を生んでしまったのか、私にどんな罪があるのかと愚痴をいう。私たちはそういう生き方をしているのではないかと思います。しかし、その根底にもっともっと大きな世界があるということに目覚めさせてもらっていく時、そういう己れ自身の姿が明らかになっていく時に、それとは違った明るい世界がある。都合のいいことも悪いこともあたりまえと引き受けさせてもらえる世界が開けてくるのだと思うのです。

私ごとの話で恐縮ですが、私も同じようなことを経験して、一人の青年の命を救ったことが

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）



あります。今から五年ほど前に、大谷大学の学生部長をやっていた頃のことです。哲学科の、私の知らない学生が突然部長室へやってきまして、「先生、しばらくお時間よろしいでしょうか」と聞くので、たまたま時間がありましたから、「結構ですよ、なんですか」というと、真青な顔をして立っていた学生が、開口一番「ぼく、死にます」というんです。あとで、石井完一郎という、以前京都大学で三十年間も学生の悩みごとを聞いてこられた先生から、そういう例はよくあることだと伺ったのですが、私にとっては最初で最後の経験でした。びっくりしました。「死にます」といわれて、「それじゃ死になさい」というわけにもいかず、困りました。それで、とにかく中へ入ってもらいました。「それでどうなんだ。失恋でもしたのか」というと、「先生、そんな低次元の問題ではありません」という。「そうか、低次元の問題ではないのか。それじゃ顔色も悪いし、どこかからだでも悪いのか」というと「いいえ。ただ、三日ほど飯食ってません」、こういうんです。これは厄介なことだと思って、そこに座らせました。そして、一体なんだ、と聞いたら「生きてるってむなしいですよね」、こういうんです。「私はまじめに勉強しているつもりです。大学も多分、四年間で無事卒業できると思います。そして就職も、ある程度の所へ行けます。いずれ好きな人ができれば結婚もしますし、子どもにも恵ま

れます。一生懸命に仕事をすれば、ある程度、地位も名誉も得られるかもしれません。しかし、それが何になるんですか。五十年経ったら死んでしまうんですよね。どれほどあくせく働いても、どんなに子どもを育てても、どんなに地位や名誉を与えられても、五十年経ったら死んでしまうんですよね。むなしいですよね。先生、むなしくありませんか。」私も全く同感で、「そうだなあ。本当に、君のいうとおり、人生ってむなしいなあ。」こういうとその学生は私をキッと見据えまして、「それじゃ先生は何のために生きてるんですか。」こう問い詰めるんです。

それで私は彼に言ったんです。「君の言うている職業、家庭、子ども、名誉、地位、こんなものは全部消えていく。そんなものは一時の幻に過ぎない。そんなものに生き甲斐を持っていれば、子どもは手から離れていくし、職業といってもその職場にいる間だけのことで、一時しのぎに過ぎない。生き甲斐でもなんでもない。そんなものを頼りにしていれば、人生はむなしいに決まっている。それについては君と全く同感だ。ところで君にはお父さん、お母さんいるか。」こう聞くと、「はい、元気でいます」、と答えたので、「そうか、それじゃ君が死んだら、お父さん、お母さんはどんなにか嘆き悲しむだろうな」、こういったんです。

そうするとソファーに座っていた学生が黙りこんで、下を向いてしまいました。そして膝の

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）



上に置いた拳をぶるぶる震わせたかと思うと、涙をその上にポトポト落としました。彼は二十歳の青年です。三日間も飯を食わずに生きていることの意味を探し求めた。生きている価値はどこにあるのかと、真剣に考え続けたのです。一瞬のごまかしの中で、いい加減に生きるのは嫌だ。死んだほうがましだと思い詰めたのです。その時に、死ねばお父さん、お母さんが嘆き悲しむだろうという一言で、彼は泣き出した。その事実に彼は気付かなかったんです。

そこで私は言いました。「君の言ったようなことだけを頼りに生きればこんなむなしいことはない。しかし唯一つだけはっきりさせておきたいことがある。君の命は、現実のお父さん、お母さんという狭い意味ではなく、君の命が失われた時に嘆き悲しむ者を通して息づいている命なんだよ。具体的にはお父さん、お母さんの涙として表現されているけれども、その涙はもっと深くて広くて大きなものに促されて出てくるものなんだ。その涙の根源は深くて大きくて広いもので、君の命が失われたら涙するそういう世界から、君の命は今息づいているのだ。それを大悲というんだ。我々は大悲の中で息づいているんだ」、と。そして最初に申しました ような、波打ち際で一瞬の間に消えていく私という波の背景には果てしない大海がある。この波は私が作ったものではない。君の命も君が作ったものではない。私たちの命は、はかりしれ

ない大きい悲しみの中から与えられており、大海の中から君や私の命が波となって息づいている。お父さん、お母さんの涙となって流れてくるんだよ。そういう命であることだけは忘れるな。だから、もう一度静かに考えてみろ。そして、どうしても死にたいのならもう一度だけ、只今自分の上に息づいている自分の命に向かって「本当に死んでもよろしいですか」と問うてみなさい。そのうえで死になさい。そういいました。

そうしましたら「わかりました」といってその学生は帰って行きました。それから一週間、十日間は電話が掛かってくるたびに、とくに早朝や夜遅い電話にはビクッとして、こちらが参ってしまうくらいでした。というのは学生が「わかった」という言葉の中には二つの意味があるからです。先生の言ったことはよくわかりましたという意味と、先生がくだらぬことを言っていることがわかったということと両方の意味があるわけです。皆さんも今、私の話を聞いていて「なるほどなあ」とうなずいてわかってくれる人と、くだらぬ話だなあと思って聞いている人と両方いるでしょう。彼の「わかりました」はそのどちらなのかがわからなかったのです。彼はそのうち、元気な姿でにこにこしてやってきました。そして、「谷大を卒業したらもう一度やり直したい。京大の法学部の試験を受け直して勉強を続けます」といったので、そ

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）



れは結構だと言ったんです。

職業・家庭・名誉・地位といったものは、五十年経てば失われるものです。失われるが、しかしなお五十年の人生を生きなければならないのは私の命である。私たちの一生にどのような不幸や嫌なことが起ころうが、自分の一生を心の底から引き受けていける人生、力強い人生をどこで見出していくかというと、自分の命は私のものではない、涙を流す者を通しての私の命であることに目覚めることなのです。そのことだけが、自分が生きなければならない最も根源的な唯一の理由なのです。そういう私を私たらしめている、私を超えた深くて広くて無限の素晴らしいものの中から只今の命を引き継いでいる。今朝目が覚めて、よかったなあという素直な感動が呼び起こされる。そういった生きていることへの感動を見失ってしまえば、薄っぺらなむなしい人生になってしまうのではないか。本当に心の底からのうなずきのない人生はむなしいものになります。

私たちはそうした無限の素晴らしいものの中で生きているにも関わらず、それに目を開こうとしない。その目を覆い隠しているものは何か。例えば皆さんは、「あの人はいい友だちだ」とか、「あの人は悪い友だちだ、気にくわない」というでしょう。それは、その上に「私に

とっては都合が」と付けるとはっきりするのです。「いい友だち」とは「私にとって都合のいい友だち」なのです。私たちがいい、悪いと分けているのは、私にとって都合がいいかどうかなのです。もしそういうレベルでしか友だちを見ないとすれば、そこには本当の友情などあるはずはありません。今日にこにこしていた友だちが、明日は憎しみの対象に変わることもあります。そういう分別を私たちの上に起こさせるのが知性とか理性とかいわれるもので、今日最初にお話ししました安田先生も、「人間は本能で宗教を求めるけれども、理性が反対している」とおっしゃったのです。その理性のことを仏教では我といいます。「おのれ」ということです。釈尊は、人間の一番深いところに関わっている煩悩は我（おのれ）ということだ、とおっしゃいました。この我・私という思いが私たちの根底にはびこっています。その「私」という思いがあるから、「私にとって都合のいいのはいい友だち」という発想が起こります。人間の心にはびこる我という思いの最も深いものが、「私は正しい、あの人は間違っている」「私はあの人より偉い」「私は自分が一番かわいい、一番大事だ」という分別です。人間には我があるのです。我のある世界では、私の命は見えてきません。

そういう己れ自身の分別をして生きている姿に気付かないあり方を、無明（むみょう）といいます。明

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）



かりがないという意味です。例えば真っ赤に焼けた鉄棒があります。これを熱いと思って触った人と何も知らずに触った人と、どちらが火傷が大きいですか。熱いと知らずに触った人のほうが大きい火傷をしますね。それと同じことがいえます。私たちは死ぬまで我の世界から抜け切れないで生きていますけれども、己れ自身、我という思いの中で、無明の世界に生きていることに本当に目覚めていく時に、そういうことを少しも考えずに生きてきた人生とは全然違った別の明るい世界が開け、人生が輝いてくる。そういうことを仏陀は私たちに訴えかけ、問い続けているわけです。

私たちは既にしてそういう広くて深くて素晴らしい世界に身を置きながら、それをつまらなく狭くしています。それが無明であり、我ということです。その無明の世界にいることに目覚めさせていただくことが、人間として生まれたことの第一歩ではないかと思います。先程「三帰依文」の最初に「人身受け難し、今已（すで）に受く」とありましたが、人間として生まれることは非常にむずかしいことなのに、今、人間として生まれ合わせてもらっている。誰一人として人間に生まれようとして生まれた人はいません。気が付いたら只今人間として生まれている。「今已に受く」というのは、人間に生まれた喜びに満ちた言葉です。物ごとに感激するという

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

素晴らしい心を持っていながら、私たちは物質文明に毒されて、人間に生まれたことの喜び、感激を忘れているのではないか、失ってしまったのではないかと思います。そういう願いの中にあるのが私たちの大谷大学であり、この大学もまた、そういう願いの中に生き続けているのではないかと思います。

最後に私の話したことをまとめる意味で、タゴールの「はじめ」という詩を、ごく一部ですが読ませていただきます。

はじめ

「私はどこからきたの、どこで私を拾ったの？」子どもがお母さまに聞きました。
お母さまは子どもを胸に抱きしめて、半分泣き、半分笑いながら答えました。
「あなたはお母さまの願いだったのよ、可愛い子。
わたしの心に隠れていたの。
朝の光と一緒に生まれた、天からの初めてのいとし子よ、世界の命の川に浮かんで、流れてとうとう私の心の岸辺に乗りあげたのよ。」

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）



このお母さんの心の中には、子どもは私のものだとか、私が作ったんだとかいう意識は全然ありません。母親から子どもが生まれるということは、肉体的に考えれば確かにお母さんから肉体は作られます。肉体は作られた物質かもしれませんが、親子の関係は肉体の関係だけではありません。心の関係です。最近は人の命までが物質化しています。結婚式などでもよく、「子どもは何人作りますか」とか、「まだ作りません」とか、まるで物を作るような言葉を平然と使いますが、私はこの言葉を聞くとぞっとします。子どもを肉体だけで考えているわけです。物質文明の精神破壊の中で、私たち自身の精神が無意識に破壊されていくのです。大切なのは心なのです。親であり子であることを、心の中にどういうふうに確認していくか。それは、「私が作った」という意識からは生まれません。タゴールの詩に「世界の命の川に浮かんで、流れてとうとう私の心の岸辺に乗りあげた」とあるように、今、子どもの命として息づいた命の尊さ、それは母親が作ったものではない、与えられたものである、という事実に目を開いていくことです。お互いに命を頂いた者として、「子どもの命が、母である私の心の岸辺に乗りあげた」といい切れる世界に出会うこと、それが本当の人間になること、人間として完成していくということではないかと思います。大した話もできませんでしたが、この辺で終わらせて

いただきます。

――一九八五・五・二八――